

インターネットラジオ局がつくる“読む”ラジオ

AWAPURADIO

アワプラジオ通信

2016.08

アワプラジオ通信は千代田区社会福祉協議会（東京・九段下）の中にあるちよだボランティアセンターに置かせていただいています。また、アワプラジオやあべこうがかわるイベント等でも配布しています。バックナンバーがウェブサイト上でダウンロードできます。置き場を提供してくださる方も随時募集しています。発送を希望される方もお気軽にご連絡ください（連絡先は裏面）。

<アワプラジオとは> 認定 NPO 法人 OurPlanet-TV で出会った仲間、2009 年に開局したミニFM、インターネットラジオ局です。名称は OurPlanet-TV の略称であるアワプラにちなんでいます（アワプラとは別々の団体です）。

『Abe's VIEW』 Vol. 20 「求められる『遺産・遺贈寄付』の専門家」

これまで日本では公益性の高い仕事は行政が担うものという考え方が強くありましたが、少子高齢化に伴う税収の減少や財政赤字などによって行政サービスにも限界が見られることは明らかです。解決が求められている社会的課題はさまざまですがそんな中で、これらに取り組むNPOや公益法人などをはじめとするソーシャルビジネスが果たす役割は大きいといえるでしょう。しかしながら、ソーシャルビジネスはその性格上、受益者から直接的に利益を得にくいという問題点があります。

たとえば子どもの貧困問題を解決するためのソーシャルビジネスで、その当事者である子どもや親がサービスの対価を支払うことができるのでしょうか。普通のビジネスでは本人がサービスに対してお金を支払うのが当たり前ですが、ソーシャルビジネスの場合はそれが難しい、単価が上げにくいといった面からビジネスとして成立させづらいということがあります。

そうした経営上の問題を解決する手段の一つとして、寄付の募集があります。そのためにソーシャルビジネスの側がすべきことは、自分たちが取り組む社会的課題の解決でどんないいことがあるのか、なぜお金が必要なのかといったことを「見える化」して、共感の輪をつくりだしていくことです。そんな寄付のかたちの一つに、遺産・遺贈寄付があります。

40歳以上の人を対象にした遺産の処分についての調査で、どこかに寄付をしたいと考えている人が全体の21%存在するという結果があります（『寄付白書2015』日本ファンドレイジング協会）。一方で同じ調査では、実際に遺産・遺贈寄付に関して遺言書を作成している人は3%しかいないそうです。遺産を寄付するなんていうと、大金持ちが億単位の財産を行政やユニセフなどといった知名度のある財団に寄付するというイメージを抱きがちですが、たとえ1万円でも遺産・遺贈寄付です。

この統計から一つ、遺産を寄付することに関心はあっても身近に相談したりわかりやすい仕組みが整っていなかったりして、実際の行動へ移せていないという課題が見えてきます。遺贈者に人生の最期に社会貢献ができるという喜びをもたらし、それを社会へきちんと還元し、つなぐことができる専門家や専門機関の充実がいま求められています。（阿部浩一）

ヨムヨム旅行記 台北でひとり旅 嫁に来ないかと誘われた（台湾）



5月の台北の空は梅雨時期特有の灰色の雲が広がっていた。午前中はまだ曇り空だったから中正記念館を見学に行った。台湾の初代総統である蒋介石の死後、哀悼の意を表すために建立された記念堂だ。広い敷地の奥に白く滑らかな壁と八角形の紺色の屋根が見えた。厳かだが上品で穏やかな佇まいをしている。前日に見た龍山寺や行天宮はどちらかといえば装飾過多で派手な印象を受けたから、このシンプルな建物が際立って美しく見えた。

市場で魯肉飯と甘いマンゴーかき氷を堪能し、午後の時間をどうするか考えているときに大雨が降り始めた。すぐに止みそうではあったがここは割りきって土産物を探すために地下街へ逃げ込んだ。

熱気のこもる雑多な地下街を歩くうちにお茶屋さんへたどり着いた。ほうじ茶の香ばしい香りに釣られて長テーブルに座る。テーブルの端では常連らしいお爺さんが茶器を片手に写経をしていた。一人旅の日本人が珍しかったのか、お爺さんは私が座った途端カタコトの日本語で話しかけてきた。

長い時間をかけて、お爺さんは戦時中の日本軍のおかげで今の暮らしができていたという感謝に満ちた話を、ニコニコしながら私に語ってくれた。聞けば御年80歳、その昔多感な時期に接した日本という国を好きになり台湾を訪れてくれる日本人には必ず話しかけているのだと言っていた。

そのお爺さんが突然「あなたは結婚していますか？」と尋ねた。私が戸惑っているとお爺さんは真剣な表情で、「私の4番目の息子は英語も話せるし学校の先生をやっている自慢の息子だがまだ嫁がいらない。よかったら息子と結婚しないか？」と聞いて誰かの名を呼んだ。そして店の別のテーブルにいたらしい自慢の息子が現れたのだが・・・人間は中身が大事だ。それは分かっている。分かっているのだが・・・今回は残念ですが、と丁重にお断りを申し上げてしまった。

地下街を出るとまだ雨が降っていた。まさか異国の地で嫁に来ないかと誘われるとは！ 予想だにしない展開に、ひとり旅の面白さを噛みしめた出来事だった。（浅香友里）

自閉症の僕が飛びはねる理由 (2016年6月) 東田直樹 著 角川文庫・605円



自閉症の中学生が書いたエッセイ。自閉症でない人たちから疑問を持たれがちな自閉症の人の行動について、質問に答えるような形式でつづっている。本書を読む前はなぜ自閉症の人が、自閉症特有の行動をとるのか、わからない事が多かったが、この本を読んで納得するところが多かった。その行動をとる時の気持ちがよく言語化されていて、読んでみると自閉症の人から見たものごとを追体験したようだった。

自閉症の人は他者とのコミュニケーションが好きではないのだと思っていたが、それも誤解であるとわかった。人に迷惑をかけたり、嫌な気持ちにさせたりしていないか気になってひとりになるうとしてしまうのだという。

自閉症の人がピョンピョンと飛び跳ねていることがあるが、著者はその理由として、跳んでいる自分の足、叩いている時の手など、自分の体の部分が変わるから気持ちよいというのと、何かが起きた時、体が硬直してしまうのを振りほどくためだと書いていた。この部分を読んで、思わず自分もその場でピョンピョンと飛び跳ねたくなくなってしまった。自作のショートストーリーも、共感する部分7割、独特の感覚だなどと思う部分3割といった感じで、楽しく読めた。(大森周子) ※編集部注：単行本は2007年2月にエスコアール出版部刊。

その幸運は偶然ではないんです！夢の仕事をつかむ心の練習問題

(2005年11月) J.D. クランボルト、A.S. レヴィン 著 ダイヤモンド社・1620円



「人生そのものがひとつの大きな実験だ」。仮説を立てて実験をしてみて、違っていたらまた別の仮説を立てる。新しい活動を始めるときに明確な目標を持っていなければならないというのは迷信。10年後社会がどう変化していて、自分の趣味や考え方がどうなっているのか、明確にわかることなんてあり得るのか。否。

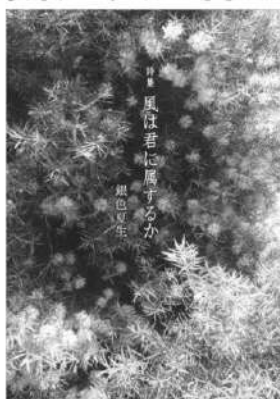
たとえ計画通りに進まなくても忍耐強く何度も挑戦したり、仮説が間違っていたりしたら別の仮説を立ててまた実行すればよいのだ。失敗しないと学べないのだから。積極的に行動することで間違いだらけだった仮説も目標が変わっていく。例えば趣味でやりたいことをいくつか試してみて、その中から本当にやりたいものが見つかるということは普通に起こりうる。

能力のとらえ方を変えよう。ひょっとすると何かのスキルがないと実験できないのではないかと、思えるかもしれない。でも能力とは学びの成果としてついてくるもの。だからまずは学ぶ姿勢があればよいのだ。ほとんどの会社が社員を採用するときに求める、最も重要な条件は「学ぶ姿勢」である。

何が好きか、何が重要かはわからない。だったら試してみるしかない。好きなことに多くの時間を割き、選択肢を1つに絞らないこと。惰性—ある定まった方向に何も考えずに進むことほど怖いものはない。

—資格試験のための勉強に時間をかけてせっかく頑張ってきたのに、辞めちゃうなんてもったいない。自由であろうとする自分にためらいの心の声が聞こえてくる。でも少しずつその声は小さくなっている。(平川凌兵)

詩集 風は君に属するか (2010年8月) 銀色夏生 著 角川文庫・473円



世に詩集と呼ばれる読み物は数あれども、詩を読む人というのはいったいどれくらいいるのだろうとふと思う。いわゆる現代詩というものはどこかとおつきにくいイメージを持たれがちだ。

それを踏まえて1980年代に登場した銀色夏生は異質である。難解さはなく、多感な年代の心象風景を平易な言葉と表現で紡ぐ中に、時折ドキッと一節に出会い立ち止まってしまう。彼女の作品と存在は現代詩人と作詞家の間に位置している。現にその出発点は作詞家であって、例えば大沢誉志幸のヒット曲『そして僕は途方に暮れる』の歌詞は彼女の手によるものだ。

その著書は多いが詩とともに自ら描いたイラストや写真をあしらったものもあって、まだ少女の面影を残した頃の森高千里が登場する『わかりやすい恋』(1987年)など、詩の世界観とも相まって心を締め付ける。いま筆者と同年代で40歳前後くらいの人の中には、銀色夏生という名前とともに角川文庫の白い背表紙を懐かしく思い出す人も多いだろう。筆者が中学生の頃などにも、文集や

寄せ書きなどにお気に入りの銀色夏生の詩を書く生徒がよく居たものだ。

誤解を恐れずにいえば、筆者と同世代の読者だった人々の多くにとって彼女の存在は、甘酸っぱい青春の思い出にして“過去の遺物”である。しかし、銀色夏生は当時の読者が夢見がちに頃を過ぎて現実の恋も経験し日常に追われ、いつしか離れていった後も変わらず、多感な年代の心をとらえた詩をつくり続けてきたのだ。一人のファンとしてそれを伝えたいと思い、あえて80年代の作品ではなく、初めての人にも久しぶりの人にも2010年に編まれた本作をお勧めしたい。(阿部浩一)